

## CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア民話の世界⑧

民話を訪ねる旅6  
～いよいよ語りの現場へ～

剣持 弘子

今回の旅がこのシリーズの山場になるのですが、この旅についてはすでに『イタリアの昔話』（三弥井書店）に詳しく書いてあるので、今回は旅の方は簡単に報告するにとどめ、その時の語りの場につながる〈お話〉を紹介することにします。イタリアの本格昔話は長いものが多く、このシリーズでもなかなか紹介する機会がありませんでした。

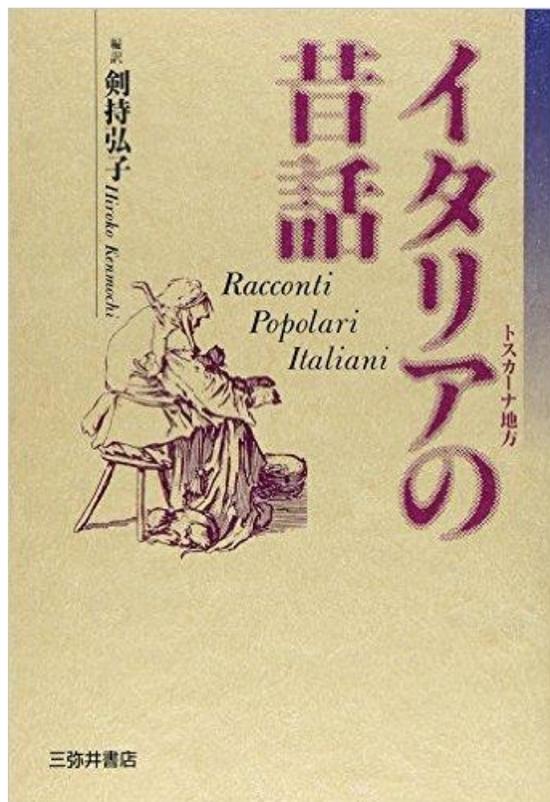
## ●ペルポリへ

山に雪の消えた二月のはじめ、私と夫は列車でガルファニャーナに向かいました。ルッカでローカル線に乗り換えて北上し、約45分で小さな駅に着くと、そこにはヴェントウレツリ教授が出迎えてくれました。そこから、さらに教授の運転する車で山道を30分、尾根沿いに家が散在するペルポリに着きました。

## ●テレーザ一家の語り

待っていてくれたのは、当時90歳のテレーザと、高校生の孫娘ジョヴァンナでした。途中で、ジョヴァンナの叔父さんで小学校教師のオズワルドが顔を出してくれました。

暖炉の前の肘掛椅子はテレーザの場所でしたが、暖炉に火はなく、今風のストーヴが部屋を暖めていました。



【ヴェントウレツリ教授の資料の翻訳本】

テレーザは淡々とした口調で語り出しました。愚か者が引き起こす、さまざまな出来事が延々と続くお話でした。私は一応、用意してきたカセットテープで録音はしましたが、ヴェントウレツリ教授と知り合ってから、記録はすべて先生にお任せ

する気になっていました。外国人である私が生半可な語学力で立ち向かうことの難しさを、いやというほど知らされていましてから。教授は方言研究者でもあったので、独特の記号を使って忠実に記録することを心がけているようでした。でも、残念ながらその味わいを日本語に訳すことは不可能です。



【ベルポリ村のテレザと教授】

テレザが話し終わると、続いて孫娘のジョヴァンナが語りはじめました。ちょっと早口で聞き取りにくかったのですが、内容はテレザの語ったのと同じ、「愚か者話」でした。

ジョヴァンナは続いてもう一話、「歌う骨」という昔話を語ってくれました。ジョヴァンナが語り終わると、それに続けて教授が歌いはじめました。

♪ おお、パストリーノ(羊飼いさん)、おお、パストリーノ…

すると、オズワルドも続きました。この話に挿入されるはずの歌をジョヴァンナが省略してしまったからでした。

今月のお話コーナーで紹介するのは、このときジョヴァンナが語ったのと同じタイプの話です。

♪ おお、パストリーノの歌が が入ります。

【今月のお話コーナー：本格昔話】

グリフォン鳥の羽(歌う骨)

昔あるところに、三人の息子をもった王がいた。王は目の病気に苦しんでいたが、それを治すことのできる医者はいなかった。あるとき、王の元に遠くから一人の老人がやってきて、

「病気を治す方法はある。だが、それにはグリフォンの嘴の上の羽をとりに行かなければならない」と、言った。グリフォンというのは、口から炎を吐き、鋭い爪のついた2本の脚をもった想像上の鳥だ。

先ず、上の二人の息子が出発した。二人はどこまでも、どこまでも進んで行き、高い山の麓の草原に着いた。その山の頂上にグリフォンが棲んでいるということだった。その草原は「愛の原」と呼ばれていて、一人の隠者が住んでいた。隠者は、これ以上行くことは出来ないと忠告したが、二人はそれを無視して登って行き、グリフォンが吐く火と煙にやられて死んでしまった。

王はしばらくの間、二人を待っていたが、あきらめようと思った。

すると、残っていた三番目の息子が言った。

「父上、私が行きます」

父親は行かせたくなかったが、息子はとうとう行かせてもらうことになった。

末息子はどこまでも進んで行って愛の原に着き、あの老人に会った。老人はグリフォンの七つの頭を切るために、七枚の刃のついた刀を与えてくれた。それぞれの刃で頭を切れば、一番大きい頭の上に、グリフォンの羽があるという。若者はグリフォンの七つの頭を切り、七枚の舌を取って、山から下りた。それから、兄たちと馬をみつけたし、老人からもらった鞭で二人に触って生き返らせた。弟は兄たちを連れて帰ろうとしたが、兄たちは弟を嫉んでいたのので、弟を傷つけ、そこに置き去りにした。

二人の兄は父親の元にグリフォンの羽を持ち帰った。だが、あまりに息子たちが自慢するので、父親は彼らの話を信じる気になれず、三人が揃ってから、褒美を与えようと言った。しかしながら末息子は一向に帰ってこなかった。

だが、弟は死んだわけではなかった。やがて起き上がると葦原に行き、傷を治した。それから、自分を父親の家に運んでもらうために、葦に変身した。

あるとき、一人の羊飼いがその葦原に行き、美しく太い葦を見つけて、葦笛を作った。笛はひとりでに鳴り、こう歌った。

♪ おお、羊飼いさん、羊飼いさん、  
私は愛の原で兄さんたちに殺された。  
私がグリフオンの羽を手に入れたばかりに。

その羊飼いは歌う笛をもって、あちこち歩き回っているうち、ある老夫婦に出会い、こう言われた。

「バビロンの王様のところに行くといい。きっと、この笛でたんまりお金がもらえるよ」

羊飼いは、バビロンに行った。兄たちは、弟そっくりの声で歌う笛の音を聞いて真っ青になった。

だが王はその笛の音を聞き、自分で吹きたくなった。王が吹くと笛は歌った。

♪ ぼくが小さかったとき、あなたはぼくにキスしてくれた、

そして、ぼくが大きくなったとき、あなたは待っていてくれた。

今、ぼくはここに来ている。

グリフオンの羽をとったのはぼくだ。

王は召使いたちを全員追い出し、新しい召使いを雇った。それから、一室にこもって、あの葦を銀のナイフで切り開いた。すると、三番目の息子が中からとびだしてきた。王はやっとグリフオンの羽で目を撫でた。

王の目は治った。王は上の二人の息子を追放し、三番目の息子に妻を与えた。

#### ●ペトロニョーラへ

次にガルファニャーナに行ったのは、二月に降った雪がやっと解けた三月初めの日曜日でした。前回のペルポリ村より、さらに北にあるペトロニョーラ村です。かなり近代的な造りのお宅でしたが、居間には昔風の石造りの暖炉があり、中では太い薪が燃えていました。近所の子どもたちも大勢来ていて、だいぶ賑やかでした。

語り手は60歳のイリーデでした。父親がプロ級の語り手だったということで、それを受け継いだ彼女の語りはかなり派手な身振りを伴っていました。

イリーデは私のために1話だけ標準語で語ってくれましたが、あとは全部方言でした。冒頭でお

話したように、詳しくはご紹介した『イタリアの昔話』に報告してありますので、ぜひご一読ください。

★次回は、旅を終えて の予定です。



【ペトロニョーラ村のイリーデと教授】

(イタリア民話研究者)

## ～会館だより～

### 『インフェルノ』を3倍楽しむフィレンツェ案内

ダン・ブラウンのヒット作『インフェルノ』は、ダンテの『神曲』を下敷きにしてフィレンツェ、ヴェネツィア、イスタンブールの3都市をめぐる。中でもフィレンツェは半分以上のページを使ってたっぷりと描写されています。ヴァザーリの回廊、大聖堂、シニョリーア広場、ロτζジャ・デイ・ランツィ、ヴェッキオ宮殿、ピッティ宮殿、ポーポリ庭園…。主人公ラングドン教授のあとを追って、私達もフィレンツェのディープな魅力を再発見する旅に出かけてみましょう。

日時： 2017年3月25日(土) 14:00-16:00

会場： 日本イタリア会館 京都本校(京都・東一条)

講師： 松本 典昭(阪南大学教授)

受講料： 受講生・一般：1,500円、

個人維持会員：500円

申込方法： 電話、会館窓口、インターネットでお申し込みください (Tel 075-761-4356)

## スピーチコンテストに参加して

石川 美智子

昨年度、毎年12月に開かれる日伊協会・イタリア文化会館主催のスピーチコンテストに参加してきました。楽しくもあり、ほろ苦くもあった経験ですが、そのことについて書いてみたいと思います。

### 〈スピーチコンテスト参加の動機〉

やはり毎年同じ時期12月に、京都外国語大学においても「イタリア語学生スピーチコンテスト」が開催されています。興味を持って聴きに行ったところ、大変刺激を受けました。

私はイタリア語を学習し始めて間もなく5年になります。1年目の終わりに近過去を学んだ時から、家で作文を書き、授業でそれを発表し、先生にそれを直していただく、ということが始まりました。最初は、1日分4、5行の日記をなんとか2ページほど書いていくのがせいぜいでしたが、先生のアドバイスでイタリア語らしい表現になることが魔法のようでとても楽しく、書くことが大好きになりました。

ところが、辞書を引き引き作文していくものから、いざ授業でそれを発表しようとするとしどろもどろになってしまい、とても“イタリア語で話している”という感じにはならないのです。

「学生スピーチコンテスト」で出場者が感情をこめて話しているのを聴いて、できれば自分にもこのようにスピーチをする機会があれば、と思いました。

ところが、このコンテストは出場資格が学生に限られています。一般人が参加できるイタリア語のスピーチコンテストは日伊協会主催のものだけのようなので、東京で行われるのですが、応募してみようという気持ちになりました。

### 〈参加の手順〉

まず、書類選考があります。実は一昨年も原稿を書いて応募したのですが、この時は書類審査を通過することができませんでした。昨年度は二度目の応募で、なんとか出場資格を得た、というわけです。

原稿提出の締め切りは10月中旬、11月中旬に結果通知が来て、約3週間の練習で本番となりました。

昨年、2016年度の出場者は12名でした。12月3日土曜日の午前11時に、会場となる東京九段にあるイタリア文化会館のホールに出場者が集められ、くじでスピーチの順番が決まりました。ちなみに私は3番でした。後から考えると、他の人があまりに上手だったので、早い順番で良かったと思います。



【スピーチの様子】

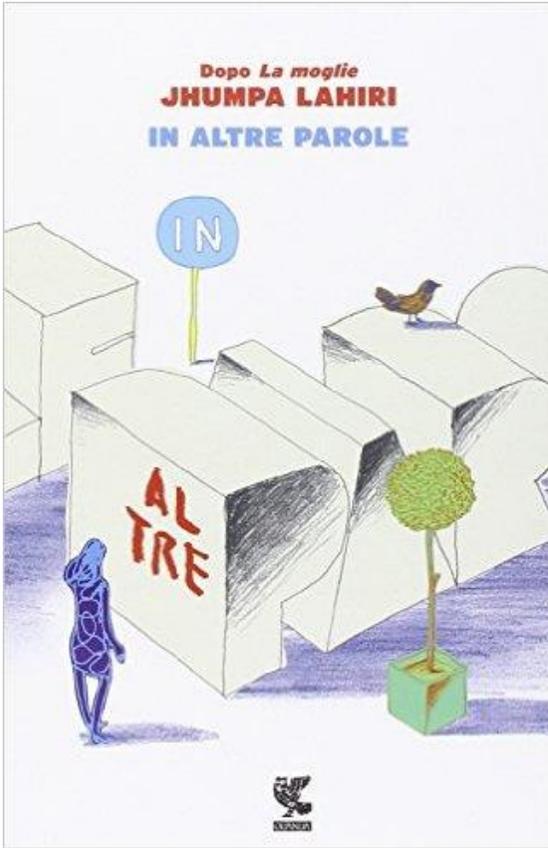
練習はマイクの前で少し声を出す程度で、諸注意の後昼食休憩となり、午後1時からコンテストが開始となりました。

スピーチは各自5分以内、その後3分間主催者からの質問に答える時間があり、それも含めてイタリア語の総合的な力を評価される、というしくみです。審査員はイタリア人3名、日本人3名の計6名でした。

このコンテストには特にテーマはありませんが、全員が、大きく言えば「イタリア語と私」といえるテーマでスピーチをしました。

### 〈私の選んだテーマ〉

私のテーマは、「“べつのことばで(In altre parole)”、私の大切な本」というものでした。ジュンパ・ラヒリというインド系アメリカ人作家のこの本を読んで、イタリア語学習への大きな励ましを得たので、それをイタリア語で表現したいと思ったのです。



【“In altre parole”】

彼女はピューリツァー賞も得ている有名な作家ですが、ずっと自分の中に母語であるベンガル語と第二の母語である英語との葛藤を抱えて生きていました。そんな中でふと出会ったイタリア語の美しさに魅かれ、夢中で勉強し出し、ついには作家として成功している合衆国での生活を中断して、更にイタリア語を極めるために現在ローマで生活しています。この本は彼女が初めてイタリア語で書いた本なのです。

本の中で彼女は、「なぜこうも自分はイタリア語に熱中するのだろうか？」と自問し、この第三の言語を学ぶことで、自分の中で対立していた二つ

の言語、またそれが象徴する二つの文化の葛藤から解放される思いを持つことができるからだ、という答えに行き着いています。

また、彼女は、イタリア語習得の苦勞、例えば半過去と近過去の使い分け、前置詞の選択、定冠詞か不定冠詞かまたは冠詞を付けないのかという判別に苦勞している様子を詳しく書き、同じ苦勞をする私を喜ばせてくれました！

そして最後に、生活上の差し迫った必要性からでなく、自由に選択した一つの言語を学ぶ無上の楽しさを述べています。この「新しい言語は、新しい人生のようなもの」という言葉に出会い、私自身も自分がイタリア語の学習で感じている喜びがどこから来ているのかを理解し、大きな発見をしたような気持ちになりました。

### 〈スピーチと質疑応答〉

さて本番なのですが、「この感動を伝えたい」という思いでかなり練習したので、スピーチはまあなんとかうまくできました。

ところが、その後の質疑応答が、とても難しく、焦ってしまってうまく答えられませんでした。

京都の「学生スピーチコンテスト」はスピーチのみだったので、いったいどんな質問がなされるのだろう、と不安ではあったのですが、多分イタリア語の学習歴等のことだろう、と簡単に考えていたので。

案に相違して、質問はスピーチの中心的なテーマに関するものでした。曰く、

「なぜジュンパ・ラヒリは、ベンガル語も英語も自分のものだと感じられなかったのか？」

質問の意図は分かるし、もちろんその答えも分かるのですが、イタリア語が滑らかに口から出てこないのです。

でもこの質問は実に核心を突いたものです。

親を満足させるために、そして親と話すためにだけに学ぶベンガル語、アメリカで生きていくために必死で身につけた英語、そして完璧に英語を習得しているにも関わらず、その外見からしばしば外国人とみなされることもある作者は、「私は二つの言語のどちらとも一体になれなかった」といい、そしてこの二つの言語の間での葛藤を、「わたしのこの二つの言語は仲が悪かった。相容れない

敵同士で、どちらも相手のことががまんできかないようだった」と表現しています。だからこそ、自分の自由意思で選んだ外国語の学習に、自分が解放され、新しい人生を生きるような喜びを感じているのです。

うまく使えば、この3分間もスピーチを更に展開する時間となるように質問をしてもらっているのに、私は残念ながらこの機会を生かすことはできませんでした。

後に続く出場者たちはイタリア語の実力もスピーチの力も非常に優れていて、質問にも滑らかに答え、私はただただ感心して聞いていました。

出場者12名中7名が現役の大学生で、彼らは特に上手でした。



【質疑応答の様子】

〈スピーチコンテストを振り返って〉

コンテストの直後は自分の力の無さに落ち込みましたが、2カ月たった今振り返ってみると、やはり貴重な経験であったと思います。

スピーチコンテストは、単に自分の思いをイタリア語で書いたり話したりする力を伸ばす機会であるだけでなく、他の人がどのようにイタリア語と出会い、イタリア語の学習を通してどのような経験をしているのかを知る機会でもあります。

また毎週の学校の授業での作文の発表や、添削された作文の見直しをもっときちんとやろう、という自覚も生まれました。

イタリア語を勉強していると、感動することはたくさんあります。また今年もこのコンテストに向けて、原稿を書いて応募してみようと思っています。

(当館語学受講生)

## ～会館だより～

### イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

3/31(金)11:00～12:30

4/1(土)11:00～12:30

●四條烏丸：ウイングス京都

4/3(月)19:00～20:30

●大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

3/31(金)19:00～20:30

### イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

4/1(土)14:00～(各人30分ほど)

### スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

●京都本校：日本イタリア会館

4/1(土)13:00～14:30

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>